

# 棕櫚の主日礼拝 (受難週)

2023年4月2日(日) 午前10時30分

午後3時00分

司式 牧師 姜 徑米

前 奏

招 詞 イザヤ書 42章1～3節

讃 詠 546

主の祈り

聖 書

詩 編 88編 2～19節 (旧 924)

ルカによる福音書 23章44～49節(新 159)

祈 禱

使徒信条

讃 美 歌 136 (1, 2)

説 教 「命をゆだね」

牧師 高橋和人

祈 禱

讃 美 歌 2編 16

聖 餐 式

献 金

頌 栄 539

祝 禱

後 奏

起立が困難な時は着席のまま礼拝します。

## 4月の祈り

主の十字架の死と復活によってもたらされた、罪からの救いに与っている恵みを再確認し、信仰にふさわしく、祈りと忍耐と希望を持って歩むことができるように。

戦火と天災によって困難と悲しみを負っている人々に、主のみ手が伸べられ、癒しと慰めが与えられるように。

教会と幼稚園の新年度の歩みが祝され、力づけられるように。

## 今日の祈り

受難週を迎え、ただ一度の主の十字架の苦しみと死に心開かれるように。まさに、わたしの罪と死を負われた恵みの重大さを見逃すことのないように。

新たな年度の歩みが、主の導きを受け、希望を見失うことのないように。

早期に戦争の終結し、平和が実現されるように。天災に苦しむ人々が力づけられるように。

体調を崩している兄弟姉妹が力づけられるように。

「命をゆだね」 高橋和人

ルカによる福音書 23:44～49

受難週を迎えた。主の十字架の道行きと死を思い起こし、心に刻む時となった。どれだけその重みを受け止めているだろうか。年中行事として、薄めてしまっていないだろうか。神の子、イエス・キリストの死は、わたしの生と死に関わっている。信仰者として、常に心しておかねばならない。

主は十字架の上で七つの言葉を残された。四福音書に分けられている。一つの福音書で語りきることができなかった。ここには主の最後の言葉が記され

ている。

主の十字架の日の真昼、12時から3時まで世界の様相は一変した。全地は闇に覆われ、太陽が光を失う。世の終わりの日、主の日の到来、主の怒りの日、裁きを行われる日のしるしだ。「主の日は闇であって光ではない」(アモス5:18、エレミヤ15:9)。被造世界全体が揺り動かされた。

人はこの闇の深さをはかり知ることができない。主イエスが受け止めている闇は人の罪と死の闇、人と神が隔てられている闇である。神殿の垂れ幕は神と人を隔てていた。

主は「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」と祈る。死の直前にも父に信頼し任せている。それは生きる時も死ぬ時も唯一の慰めとなる(ハイデルベルク問1)。

「霊」は「息」に結びつく。人は神に息を吹き込まれて生きるものとなった(創2:7)。息は命である。主はその息を父にゆだねる。「まことの神、主よ、御手にわたしの霊をゆだねます。わたしを贖ってください。」(詩31:6)は夕べの祈り、一日を生きた祈りである。贖うは神のものとなること。

祈りは霊のもの、そして命のもの。祈りが父に届き父のものとなるならば、そのときには、命もゆだねられ父のものとなる。

思い通りに生きようとし、命を自分のものとする執着は死の虚しさに耐えられない。霊によって神の息に生かされ、神と共に生きる命は失われることがない。神のものとなるからだ。たとい、死に包囲されたとしても、それで諦めることはない。確かに死の闇の恐れは深い。主はその恐れをも御自分のものとされた。そこに慰めがある。